

業績の評価について

副会長 赤岩芳彦



本学会業績賞の選考方法は昨年度改訂された。従来は数十名の投票委員による二段階の投票を行い、投票結果を最大限に尊重して決定していた。改訂方法では、投票を原則として一段階のみにして、業績賞委員会で専門的な評価を重視して候補者の決定を行うことになった。改訂の主旨は、専門家の意見をより大きく反映することで業績評価の質を高めることである。昨年度初めて実施してみたところ、委員は各分野から集められているものの、専門分野の細分化が進んでいることもあって、十分な評価が困難であり、実効を上げるためには時間と手間を大きくかける必要性が判明した。委員会では来年度に向けて改善案をほぼまとめたところである。ノーベル賞の選考においては、専門家の手間と金を相当かけているようである。これにより業績の評価の質が高くなり、結果として、賞の権威を高めている。

企業の研究部門の評価に関して、旧友が語っていたことが忘れられない。各研究部長による研究計画の発表に対して、上層部の評価が表面的であり、いわゆる派手な言葉をちりばめないと評価されないと嘆いていたのである。そうなった理由として、研究部門であるため、革新的な目標を立てることが重要視され、地道な計画が評価されず、また、事後の評価がなおざりであったと彼は主張していた。このような事態は、我が国のあちこちで起きているような気がする。特に事後評価を徹底すると、失敗が明らかになり責任が発生したりするので、これを避ける傾向が生じるのであろう。そのような現象は、いわゆる建前主義、あるいは、過去の成功にこだわり現実を疑問視することが少なくなるといった状態となって現れる。このような状況は企業活動では致命的な結果を招く。変化する情勢を把握した上で、計画を立て、実行し、その結果を評価することを地道に続けなければならない。直接的な競争がない活動、例えば、国家の運営においても、考えられる政策はたくさんあるので、事前及び事後の評価が重要である。評価が甘いのをよいことに、いわゆる“巧言”のみがはびこるのは、いつの世であっても、良くない。

評価は難しいことを忘れてはならない。版画その他で有名であった、池田満寿夫が世に出たのは東京国際版画ビエンナーレで、審査員であるグローマン博士が一人強く推薦したからだそうだ。審査員の投票のみでは彼は選ばれなかったに違いない。彼のその後の活躍ぶりについては、推薦したグローマン博士自身が驚いていたと聞いている。

学会は、学問及び研究開発の業績発表の場である。他人の業績を正しく評価するように努めることは、結果として、研究者・技術者としての自分の資質を高めることにつながる。学会では、自分の業績に対する他人の評価を過度に気にかけることは不要である。自分自身を謙虚に誠実に評価すればそれでよい。後になってからでも、正当な評価が得られることが多い。これは、戦争や企業などにおける取り返しが困難な活動の評価とは異なり、研究者・技術者の特権である。